

参考資料③ 重要自然マップにおける「重要な自然」

重要な自然		選定理由	景観写真		使用するデータ
重 要 な ハ ビ タ ッ ト	① 藻場	水域における生物のネットワークの拠点であり、同時に生物の移入・定着の場になっている。魚介類の産卵場、稚魚のかくれ場及び成長の場としての機能のほか、水産資源かん養の場、CO2 の固定、水質の浄化などの環境機能・食料の供給機能を有しており、また、ふるさとの海中景観を形成するなど、重要なハビタット。東北地方太平洋沿岸地域の藻場は外洋に面した湾口部に位置することが多く、また、この地域を特徴付けているワカメやコンブなどの藻類は一年生のものが多いことから、震災による影響は比較的小さかったと思われるが、魚介類等の水産資源を支えるハビタットであり、復興の視点からも重要。			・第 5 回自然環境保全基礎調査 ・平成 24 年度調査 生態系監視調査 ・モニタリングサイト 1000 沿岸域調査
	② アマモ場	藻場と同様、水域における生物のネットワークの拠点であり、同時に生物の移入・定着の場となっている。魚介類の産卵場、稚魚のかくれ場及び成長の場、コクガンなどの渡り鳥の採餌・生息の場としての機能のほか、水産資源かん養の場、CO2 の固定、水質の浄化などの環境機能・食料の供給機能を有し、ふるさとの海中景観を形成するなど、重要なハビタット。 東北地方太平洋沿岸地域のアマモ場は津波の力が集中しやすい湾奥に位置することが多く、震災により底質ごと消失するなど多くの生育地で大きな影響を受けた。アマモ場のうち、干潟と連結して沿岸のネットワークを形成する場はとくに重要。魚介類等の水産資源を支えるハビタットであり、復興の視点からも重要。			・第 5 回自然環境保全基礎調査 ・平成 24 年度調査 生態系監視調査 ・モニタリングサイト 1000 沿岸域調査
	③ 干潟	貝類・カニ類をはじめとするベントスの生息場、産卵場や稚魚の成育場、渡り鳥の飛来地として利用されている。また、防災的な機能、水質や底質の環境浄化機能が極めて高い場である。陸と海をつなぐネットワークの場であり、水産資源かん養の場、潮干狩りなどのレクリエーションの場にもなっている。東北地方は全国的にみても、もともと干潟が少なく、干潟同士のネットワークを考慮すると存在する干潟はすべて重要といえる。 東北地方太平洋沿岸地域の干潟は、地域や立地などにより震災による影響も様々であったが、底質や底生動物の生息に大きな影響を受けた場所でも、震災前の状況に戻りつつある状況が各地で見られ、基盤の回復とともに、干潟の機能を回復する可能性は高いと考えられる。また、震災後に新たに出現した干潟も多くあり、陸と海をつなぐネットワークや干潟同士のネットワーク形成の観点から、これらの干潟も全て重要であると考えらる。			・第 5 回自然環境保全基礎調査 ・平成 24 年度調査 生態系監視調査 ・モニタリングサイト 1000 沿岸域調査 ・有識者提供情報
	④ 砂浜(砂丘植生)	海から陸にかけてのエコトーンの重要な構成要素であり、ハマボウフウ・ハマベンケイソウ等の重要植物、カワラハンミョウ、ゴミムシ類をはじめとする砂浜性昆虫類の生息やコアジサシ等の絶滅危惧種が繁殖する場としても重要。東北沿岸では海水浴などのレクリエーションの利用の場もかつては多々あり、白砂青松として海岸林とともに景観上も重視されるふるさとの風景をつくっていた。また、飛砂防止や波浪を抑制する防災機能も重要。 東北地方太平洋沿岸地域の海岸は、地形が大きく変化し、基盤が流出したところも多くあったが、その半面、いち早く再生した場所もあった。 重要自然マップでは、砂浜の生態系や機能は、砂浜とそこに成立する植生が一体となって発揮されることから、砂丘（基盤）と砂丘植生をあわせて示した。			・砂浜：震災後植生図の「自然裸地」 ・砂丘植生：震災後植生図の「砂丘植生」、「ハマナス群落」、「ハマニンニク－コウボウムギ群落」、「ハマグルマ－コウボウムギ群落」
	⑤ 海岸断崖地・岩礁(自然草原)	津波浸水域のうち、構造物や砂浜ではない崖地や岩礁海岸等の自然の立地。風衝や波浪にさらされる厳しい立地であるが、防災機能を果たす場として重要。アカマツ等一部の木本が生育するほか、コハマギク群落、ハチジョウススキ群落などの自然草原が展開し、とくに三陸地域では北山崎をはじめ重要な景観の構成要素となっている。このハビタットは岩礁から藻場につながる沿岸生物の生育の場であり、人とのかかわりではフノリ等の恵みの収穫も行われている。なお、このハビタットは津波浸水域全体でも約 50ha と面積的には狭小。			・震災後植生図の「コハマギク群落」、「ハマオトコヨモギ・コハマギク群落」、「ラセイタソウ-ハマギク群集」、「ハチジョウススキ群落」 <div>（左）青森県大須賀海岸 （右）千葉県旭市</div>

重要な自然		選定理由	景観写真		使用するデータ
重 要 な ハ ビ タ ツ ト	⑥ 森林・樹林地（残存樹林）	<p>森林の公益的機能として広く知られる多様な機能を発揮する場であるが、東日本大震災による顕著な影響を受けた。森林・樹林地は、多くの生物に生息の場、繁殖の場を提供しているほか、CO2 固定、水資源確保、土壌の形成などの基盤的な役割を担い、環境浄化機能に優れる場である。人とのかかわりでは、木材・林産物の提供のほか、緑陰の提供、気象緩和、良好な景観形成や各種ふれあい活動の場として重要。</p> <p>東日本大震災では、防風林として長年維持され、地域にも親しまれてきたクロマツ植林がとくに大きな影響を受けており、残存する森林・樹林地は重要な環境資源となっている。重要自然マップでは津波浸水域の自然林、二次林、植林をあわせて「森林・樹林地（残存樹林）」とした。なお、ニセアカシア低木林、イタチハギ群落などの外来種からなる群落は重要な自然から除外している。</p>	 オニグルミ林 岩手県津軽石川 2013 年	 クロマツ植林 宮城県井土浦 2013 年	<p>・自然林：震災後植生図の「タブノキ群落」、「スダジイ群落」、「イヌシデ-アカシデ群落」、「モミ群落」、「ハンノキ群落」、「クロマツ群落」、「ヤナギ高木群落」、「ヤナギ低木群落」、「マサキ-トベラ群集」</p> <p>・二次林：震災後植生図の「ブナ-ミズナラ群落」、「アカマツ群落」、「コナラ群落」、「ケヤキ群落」、「オニグルミ群落」、「低木群落」</p> <p>・植 林：震災後植生図の「クロマツ植林」、「スギ・ヒノキ・サワラ植林」、「アカマツ植林」、「竹林」</p>
	⑦ 森林・樹林地（植林跡地）	<p>津波浸水域では、クロマツ植林をはじめ森林・樹林地は大きな被害を受けたが、その跡地では震災後さまざまな環境が見られるようになっている。植林の根返り跡には各所に水域ができ、そこではヨシ・マコモのほか重要種ミクリの生育、トンボ類等昆虫の多く生息する場となるなど湿地環境が展開しているところがある。また、内陸側の植林跡地には津波由来と思われる砂丘植生が成立するなど、小さいが多様な環境が見られている。植林跡地の一部では今後森林として再生する場もあると思われるが、あらたにできあがった小湿地や砂丘植生地は今後の植生遷移等による新たな動物種の定着など、環境の形成が注目されるハビタットである。この重要自然マップでは、植林跡地という「場」に生じた、震災による環境改変をもたらしたさまざまな特殊環境を重要な自然の一部として扱った。</p>	 根返り跡の小湿地 宮城県仙台市 2012 年	 ミクリ 宮城県広浦南 2013 年	<p>・震災後植生図の「植林跡地」</p>
	⑧ 湿地植生（塩性湿地植生含む）	<p>湿地に生育するヨシ、ツルヨシ、オギなどが優占する環境で、湿地の多様な機能を有している。RDB 種の多くが湿地性の種であることから希少種も多く生息するハビタットであり、洪水の抑制、気候の緩和等の防災的機能、生物が関与する環境浄化機能を有している。また、ヨシは葦簾、マコモは食用など人の利用に供され、水と植生がつくりだす風景はふるさとの景観としても重要。</p> <p>これらの環境は、震災前から湿地環境として重要な場所であったが、震災による地盤沈下や冠水により新たに出現したものも多く、重要自然マップではそれらの両方を重要な自然とした。</p> <p>なお、湿地植生には、湿地植生（震災前後で湿地植生）、あらたな湿地植生、塩性湿地植生（震災前後で塩性湿地植生）、あらたな塩性湿地植生がある。</p>	 震災前後変化なし千葉県一宮川	 新たな湿地 宮城県山元町	<p>・湿地植生：震災後植生図の「ヨシクラス」、「ツルヨシ群集」、「オギ群集」、「ヒルムシロクラス」、</p> <p>・塩性湿地植生：「塩沼地植生」（シオクグ群落、ハママツナ群落等）。</p>
			 塩性湿地（震災前後変化なし） 青森県高瀬川	 新たな塩性湿地 宮城県蒲生 内藤俊彦氏提供	

重要な自然		選定理由	景観写真		使用するデータ
重 要 な ハ ビ タ ツ ト	⑨ 草原(二次草原)	<p>草原は、植物、昆虫など草原性生物の生息の場、多くの鳥類の繁殖や休息の場として重要な生態系を形成している。また、人とのかかわりではカヤ・ススキ等の資材としての活用、ふるさとの良好な景観が展開する場でもある。このような身近に存在し、豊かな生態系を育む自然のハビタットである草原（二次草原）を重要な自然とした。</p> <p>かつて草原は野焼きや採草の場であり、国土面積の約 2 割と広く分布していた。とくに三陸の丘陵地には黒ボク由来の広い草原があったとされ、イヌワシの生息にもつながっているが、利用の減衰とともに面積を減らしており、現在では、津波浸水域全体でも 530ha 程度と小さくなっている。なお、津波浸水域では草原の多くがススキ群団であるが、重要自然マップでは低茎のメダケ群落、アズマネザサ群落もこのハビタットにまとめた。</p>	 <p>ススキ群落 宮城県山元町 2013 年</p>		・震災後植生図の「ススキ群団」、「アズマネザサ群落」、「メダケ群落」
	⑩ 非耕作農地(水田雑草群落)	<p>非耕作農地（水田雑草群落）は、冠水や地盤沈下によって新たに出現した湿性の環境である。ここでは、休眠していたミズアオイをはじめとする重要種が生育する場となり、開水面はトンボ類やミズスマシ、ガムシなどあらたな生物の生息や、湿った農地はガンカモ類の利用する場となるなど、各所で水辺の生物のネットワークの要素を形成している。これらの重要種の生息する環境は学びの対象としても重要である。今後、湿性の環境が持続するならば、このハビタットは、生物の生息の場と同様、防災機能、環境浄化機能等においても「湿地植生」に類似した役割を果たしていくと思われる。</p> <p>なお、非耕作農地（水田雑草群落）は震災の影響により一時的に出現したものも多く、今後の復田や乾燥化なども考えられるが、かつて湿地・河川・湖沼等の水辺であった場所はもとも湿地としてのポテンシャルが高く、湿地環境として維持されやすい場所と想定される。重要自然マップでは、このような場所も表現している。</p>	 <p>非耕作農地（水田雑草群落） 宮城県石巻市 2012 年</p>  <p>同 旧版地図では湿地 福島県南相馬市 2013 年</p>		・震災後植生図の「非耕作農地(水田雑草群落)」のうち、震災前植生図で「水田雑草群落」、「放棄水田雑草群落」、「湿地・開放水域」だったものの
	⑪ 河川・湖沼等水域	<p>河川・湖沼は自然環境の骨格であり、生物多様性を支える水域の屋台骨となっている。ウナギ・モクズガニ・アユ・サケなどの回遊性生物を支えるネットワークの軸としても機能し、水辺の自然環境の縦横断的な連続性が果たす役割はきわめて重要。また、水辺は良好な景観資源であり、人々のいこいの場、学びの場でもある。</p> <p>東北地方太平洋沿岸地域の河川・湖沼は、震災による津波・地盤沈下により、北上川に代表されるように河川沿川の景観を大きく変えたところも多い。また、新たに開放水面が生じた場所もあるが、本マップでは、これら全てを重要な自然とした。</p>	 <p>津軽石川 岩手県宮古市 2013 年</p>  <p>北上川（旧追波川） 宮城県石巻市 2014 年</p>		・既存の河川・湖沼：震災後植生図の「開放水面」のうち、震災前植生図で「河川・湖沼」だったもの。 ・新たに出現した河川・湖沼：震災後植生図の「開放水面」のうち、震災前植生図で「河川・湖沼」以外だったもの。
a. RDB 種の生息(生育)地		<p>希少種等重要種保護の観点から、重要種そのものとともに、重要種の生息(生育)が確認された場所を含む生育（生息）地の保全が重要。</p> <p>とくに東北地方太平洋沿岸では、震災後の現状を示す情報が乏しく、RDB 種等重要種に関する情報の蓄積が急がれている。重要自然マップでは「平成 24 年度調査」でえられた植物の重要種に関する現地確認データを掲載している。また、干潟、アマモ場、藻場、海鳥繁殖地の生態系監視調査でも震災後の重要な生物のモニタリングを行っており、重要自然マップの中に記述している。このほか、地域の有識者のヒアリングでも重要な生物の生息地情報の提供を受け、重要自然マップの記載に反映している。</p>	 <p>カワラハンミョウ 井土浦 2013 年</p>  <p>チョウトンボ 浦尻 2013 年</p>		・H24 現地調査データ(植物) ・生態系監視調査(干潟・藻場・アマモ場・海鳥繁殖地) ・有識者ヒアリング(主に干潟)

重要な自然	選定理由	景観写真	使用するデータ
b. 特定植物群落	<p>自然環境保全基礎調査において、特定植物群落選定基準によって選定された自然性の高い群落、きわめて希な植物群落、郷土景観を代表する群落等重要な植物群落で、津波浸水域には 78 件の群落が該当。</p> <p>「平成 24 年度調査」では、津波浸水域の特定植物群落を調査し、平成 25 年度には補足調査を実施。その結果、広田湾「高田松原のクロマツ植栽林」のように、津波により完全に消失したものから、津波等により群落全席の縮小が認められるもの、被害のほとんど見られないものまで影響の程度は場所によりさまざまであった。重要自然マップでは、このような生物多様性の観点から重要な特定植物群落の範囲を図示し、ハビタットの凡例（森林・樹林地（残存林）、森林・樹林地(植林跡地)）等で内容（被災程度）を表現している。</p>		<ul style="list-style-type: none">・第 2 回・第 3 回・第 5 回自然環境保全基礎調査・日本の重要な植物群落（特定植物群落）
c. 景観資源、史跡・名勝・天然記念物	<p>第 3 回自然環境保全基礎調査で整理された「日本の重要な自然景観」に該当する火山景観、山地景観、特殊地学景観、石灰岩景観、河川景観、湖沼景観、海岸景観など国土レベルでの代表性を有する景観は、地域を特徴づける自然環境資源として重要。また、史跡・名勝・天然記念物は、自然資源のうち特に傑出した価値をもつ文化財としての指定案件として重要。</p> <p>これらは地域のシンボルであり、人々の精神的なよりどころとなっている。</p> <p>このほか、全国的視野で選定された、「日本の白砂青松百選」、「日本の渚百選」、「日本の音風景百選」、「日本のかおり風景百選」、「未来に残したい漁場漁村の歴史文化財百選」、「平成の名水百選」、「日本の快水浴場百選（海水浴場）」等自然環境に関する資源も重要な自然の対象としデータ化した。津波浸水域にはこれら百選のうち、28 件、全国の 4%程度が含まれている。</p>		<ul style="list-style-type: none">・第 3 回自然環境保全基礎調査(日本の必要な自然景観)・国指定文化財等データベース・人と自然が織りなす日本の風景百選
d. 保護地域 等	<p>自然公園、鳥獣保護区、重要湿地 500、ラムサール条約登録湿地潜在候補地などの保護指定地域は、重要なハビタットや、「a：RDB 種の生息（生育）地」、「b：特定植物群落」、「c：景観資源、史跡・名勝・天然記念物」、などの重要な自然資源を担保する地域である。 良好な自然の参考情報として重要自然マップに掲載した。</p>		<ul style="list-style-type: none">・自然環境情報 GIS・数値地図・基盤地図情報
e. 旧版地図判読結果	<p>およそ 100 年前の明治末から大正初期の旧版地形図から当時の河川、湖沼、湿地、砂丘、砂浜を読み取った情報。現在の自然は過去の自然の上に成り立ち、土地のもつ脆弱性(かつての河道は軟弱であるなど)や潜在性(かつての湿地には当時の貴重な植物の埋土種子が含まれ、相当な時間をおいても条件が揃えば発芽する、など)を示す情報として重要。震災復興では、今後の土地利用を考える上でこのような過去の自然情報は重要。</p>		<ul style="list-style-type: none">・旧版地形図・平成 24 年度調査結果
f. 神社、寺院、公園等のランドマーク	<p>地域住民に親しまれている身近な自然。津波浸水域に近い神社はかつての地震・津波の被害の「戒め」的なシンボルとしても重要。</p>		<ul style="list-style-type: none">・数値地図・基盤地図情報